

〈論文〉

プラトンの『饗宴』におけるエロスとそのものの認識についての考察

—— 知識人の人間観ならびに社会観 (6) ——

Studies on Eros and Nature of Thing in Platon's 『Συμπόσιον』

—— High-Brow Views with Human Nature and Social Relationship (6) ——

久保田 義 弘

要 旨

本稿では、プラトン (Πλάτων, Plátōn) (前 427 年-前 347 年) の『饗宴』を通して、個別のものの観察から始め、ことの本質 (ものの本性) を見極める認識論について考察する。すなわち、彼は、個別・具体的な美しいものから美そのもの (すなわち、美の本質、あるいは美の本質) を認識する手順について考察している。この手順は、プラトンの『饗宴』において示された、愛することから認識することに到る手順として与えられる。本稿では、個別・具体的な美しい肉体から美そのものの認識に到るための手順が考察される。それは、個別・具体的な肉体的美しさを求める者 (愛する者) は、

- (1) はじめに、この世 (地上) の個々の美しいものに心を引かれる (愛する)、つまりある人の顔や手とかその他肉体 (身体) に属するものの美しさにひかれ、
- (2) 次に、最高美を目指し、梯子の階段を昇るように、絶えず高く昇っていく、すなわち、一つ一つの美しい肉体的な美しさから二つへ、二つからあらゆる美しき肉体 (身体) へと進み、そして、あらゆる肉体 (身体) の美が同一不二であると看取り、一人に対する熱烈な情熱が取るに足らぬものと見て、その熱を冷まし、その愛をあらゆる肉体 (身体) に及ぼし、
- (3) そして、美しき肉体 (身体) から美しき心霊に進み、肉体的美しさより心霊上の美しさに高い価値を置き、
- (4) その上で、美しき職業活動へと進み、たとえば、最高で最善な国家と家の統制に関することへと進み、
- (5) 美しさ (エロス) を語るには、美しさの真実を究める必要があるので、美しき職業活動から美しき学問に進み、その学問から美そのものの学問に到達し、
- (6) 最終的には、美そのもの (美の本質) を認識する。

ここに到って美そのものを観得する (認識する) ことになる。プラトンは、肉体的な愛欲

者から愛智者に到って、ものの本性・本質を見極めることができるという。また、そこにおいて人生は生き甲斐があると言う。プラトンの『饗宴』において、肉体的な愛欲者が、愛智者となり、美そのものを（ものの本性）認識することに到ることを、本稿では考察する。

キーワード：美そのもの、本質（真実在）、影、認識論、愛欲者、愛智者、エロス、徳、智慧

はじめに

デカルト（René Descartes）（1596年生-1650年没）は、彼の著作『省察』の献辞¹において、「靈魂に関しましては、多くの人々はその本性を究めることは容易ではないと考えておりますし、また或る者は、人間的な根拠からは靈魂が肉体と同時に滅び去るとの確信をいただくにいたるほかに、ただ信仰はよってのみそれとは反対のことが理解せられるときえあえて主張いたしております²」と述べ、信仰をもたない人々は「神の存在したもうこと、および人間の精神が身体から区別されていることを信じようと欲しない原因は、この二つのことがこれまで何人によっても論証されることができなかつた³」と主張すると、述べている。靈魂（魂）とは何か、また肉体と靈魂（魂）の関係、肉体が朽ちた後に魂は生き続けるのかどうかを説明する力を持ち合わせる優れた人々がいる、あるいは存在したことをデカルトは示唆している。本稿では、その論証力を有する根拠の一つがプラトンによって提唱されていると考えている。この稿では、プラトンの肉体と魂の区別に関する論証を検証し、さらにプラトンの神の意義についても考えてみよう。

本稿では、古代ギリシヤの哲学者プラトン（Πλάτων, Plátōn）（前427年-前347年）を取り上げる。彼は、イデア論や想起説を提唱した哲学者、ソクラテスを対話者の一人として数多くの対話編を著した思想家・文筆家（詩人）、講師料などの金銭を得て青年に人生の処世術（生きる技術）を講義したソフィストの教義に反論を持って対抗した問答術の達人、政治家になる希望あるいは夢を抱いて政治・国家について考察した国家論者、またソクラテスに心か

¹ デカルト著（梶田啓三郎訳）『省察』（7から14ページ）参照。デカルトは、彼の『省察』をパリ神学部の学部長ならびに博士諸氏に献げている。デカルトは、神の存在の問題と靈魂（魂）の問題は、神学によってよりも哲学によって論証されることが必要であると常々考えていたと述べている。デカルト自身は神の存在を信じ、またその存在について聖書が教えていることを信じていると述べている。デカルトは、「信仰は神の賜物でありますから、ほかのことがらを信ぜしめるために恩寵を垂れたもうその神は、また、私たちが神の存在したもうことを信ぜるように恩寵をさずけたもうことができる」と述べている（上掲書『省察』（8ページ5から7行目））。ここから判断するに、デカルトは無神論者ではないと言えるであろう。しかし、デカルトは、世の中には無神論者がいて、神の存在を信じていない人々がいることを認めていると思われる。

² 上掲書『省察』（9ページ7から10行目）。

³ 上掲書『省察』（9ページ13から15行目）。

ら信頼し敬愛したソクラテスの愛弟子であった。そのプラトンによる『饗宴』(Συμπόσιον)⁴は、プラトンの中期対話編の作品である。『饗宴』の舞台は、悲劇作家アガトン(Αγάθων, Agathōn)(前448年頃生-前400年没)が悲劇コンクールで初優勝した際に設けられた祝勝宴から取られていると推察される。この祝勝宴は前416年に開催され、その饗宴でのエロスの演説が回想的に語られているのが対話編『饗宴』であると思われる。その饗宴はアガトンの家で催され、その饗宴の参加者数は不明であるが、プラトンが取り上げているその演説者は、ソクラテス(Σωκράτης, Socrates)(前469年頃生-前399年没)を含めた6人である。その演説者の演説を回想して語る人物(説話者)は、アポロドロス(Απολλόδωρος, Apollódōros)(前429年生-?)である。その聞き手はグラウコン⁵である。アポロドロス自身は、グラウコン同様に、その祝宴における演説者ではなく、また同席者でもなかった。アポロドロスは、アリストデモス(Αριστόδημος)⁶から聞いた祝宴での話し(演説)を再び友人に物語っている。この意味で、『饗宴』という作品は、二重の間接話法で綴られた対話編である。

アポロドロスという人物であるが、彼自身によって「熱心にソクラテスと交わり、そのいうこと⁷を為すことを知ろうと毎日心を傾け出すようになってから、まだ三年も経たない⁸」と語られていることから、彼は、ソクラテス(のみ)を崇敬していたと思われる。プラトンの『パイドン』において、アポロドロスは「ずっと前から涙を流しつづけていたのですが、ついにそのとき、嘆きと怒りのあまり大声をあげて泣きだし、そこにいたすべての人の心を引きちぎった⁹」とソクラテスの死における彼の悲しみが語られている。このことから、アポロドロスは「弱気男⁹」と綽名された。また、アポロドロスについては、グラウコンは「君はいつも君自身をも他の人達も悪罵している¹⁰」と語り、ソクラテス以外の人を軽蔑する人物としてアポロドロスをプラトンは評価している。その説話者であるアポロドロス、彼に演説の内容について話をしたアリストデモスの両名はソクラテスを心から慕い敬愛していた人物であっ

⁴ プラトンの『饗宴』の成立年は、前385年以降であると考えられる。それは、「アルカディヤ人達がラケダイモン人によって引き裂かれたように」とあることから判断される(プラトン著(久保 勉訳)『饗宴』193(84ページ3から4行目)。このことが起こったのは、前385年であったからである。プラトンはソクラテスを登場させていることから、前399年以前であると考えているのかも知れない。例えば、プラトンは前400年頃を想定して『饗宴』を仕上げているのかも知れない。

⁵ この人物がプラトンの年上の兄弟であれば、グラウコン(Γλαύκων)(前445年生-?)である。

⁶ 彼は、いつでも跣足の、小柄な男であった。「この男はあの会合にも出ていたのだ、ソクラテスの敬愛者」で、「当時もっとも熱烈だった連中の仲間だ」と語られている(プラトン著(久保勉訳)『饗宴』173(45ページ15から46ページ1行目)参照)。

⁷ プラトン著(久保 勉訳)『饗宴』173(45ページ4から5行目)。

⁸ プラトン著(岩田春夫訳)『パイドン』117d(175ページ7から9行目)。

⁹ 上掲書『饗宴』173(46ページ16行目)。

¹⁰ 上掲書『饗宴』173(46ページ14から15行目)。

た。それ故に、プラトンはこの兩名を『饗宴』の構成者に選んでいる。

饗宴でのテーマがエロスとした事情は次のようであったと思われる。それについてはファイドロス（パイドロス）(Φαῖδρος)¹¹が「エロスの神に対しては今日に至るまで誰一人としてこれにふさわしい讚美の歌をあえてささげた者がない。あれほどに偉大な神でありながらかくまでに無視されたているのだ」¹²と語り、また、彼は、「詩人たちはほかの神々のためには ヒュムノイ 讚美歌や バイオーネス 謝恩歌を作っているが、あれほど古くて偉大な愛の神エロスのためには、今までに出た非常に多くの詩人の中でただの一人もかつて頌歌を作ったものが無かったということは」¹³と語っている。

本稿は5節から構成される。第1節は、ファイドロス（パイドロス）のエロス讚美の演説で、1.1 エロスの神の発生、1.2 最大福祉の源泉としての神エロス：羞恥と名誉慾、1.3 愛者の冥府からの帰還と神エロス、第2節は、パッサニヤスのエロス讚美の演説で、2.1 エロスは唯一つか、2.2 愛者に従うこと：醜悪・恥辱か、2.3 愛者の誉れと恥辱、2.4 愛者に寛大な慣習か、それとも禁止され非難される慣習か、2.5 二種の慣習の結合である。第3節は、エリュキシマコスのエロス讚美の演説で、3.1 医術とエロス、3.2 音楽とエロス、3.3 天文学（含む気象学）とエロス、3.4 敬虔と不敬虔：神々と人間の間でのエロスの威力である。第4節は、アガトンのエロス讚美の演説で、4.1 エロスの性質、4.2 エロスと徳ならびに智慧、4.3 アガトンの演説に対するソクラテスの問い、4.4 エロスの讚美：アリストファネスの演説からである。第5節は、ソクラテスの（ディオティマの見解に基づき）演説で、5.1 エロスはいかなる性質を持つか、5.2 エロスの人間にもたらす効果・利益、5.3 不死なるものの追求：愛現象とは何か、5.4 愛の奥義と神の啓示、5.5 愛の奥義に到る手順の纏め：認識論である。

第1節 ファイドロス（パイドロス）のエロス讚美の演説

1.1 エロスの神の発生

ファイドロス（パイドロス）は、最初に、神エロスの讚美より始める。彼は、原初神としてのエロスにつて演説する。ファイドロスは、エロスには両親がないことのその証拠をヘシオドスの『神統記』からひているが、『神統記』では、原初の生成において、

「まず原初にカオスが生じた さてつぎに
胸幅広い大地 ガイア 雪を戴くオリュンポスの頂きに

¹¹ パイドロス（ファイドロス）は、プラトンの対話編『パイドロス』でソクラテスと対話する人物である。

¹² 前掲書『饗宴』177（55ページ2から3行目）。（以下において同じテキストからの引用である）

¹³ 前掲書『饗宴』177（54ページ54ページ10から12行目）。

宮居するやおよろずの神々のとこしえ常久にゆるぎない御座なる大地 と
みちびろ路広の大地の奥底にあるあゐあゐ暖々たるタルタルロス

さらに不死の神々のうちでも並びなく美しいエロスが生じたもうた。]¹⁴

を引いている。これを受けて、パルメニデスは「それはエロスをばあらゆる神々のうち最初に思い創りき」¹⁵と詠っている。これを、ファイドロスは「エロスは偉大な神である。人間の間においても、神々の間においても、驚異すべき者とされている」¹⁶証拠として語っている。愛の神が偉大であることには多くの理由があるが、とりわけその発生の故であると彼は考えている。ファイドロスは、エロスについて、神々の中で最も古いことがその誉れである¹⁷と物語っている。

1.2 最大福祉の源泉としての神エロス：羞恥と名誉慾

最も古い神であるエロスは、また最大福祉の泉でもあることをファイドロスは語る。すなわち、エロスは少年を愛する人（愛者）をもたらすこと。また愛する人（愛者）には愛する少年を与えるとファイドロスは語る。愛は、美しく生きようと欲するすべての人にとって、「全生涯の指針となるべきもの」¹⁸をエロスがその魂に植えつける。その指針となる魂とは、恥ずべきことに対する羞恥と、称揚すべきことに対しては名誉慾である。ファイドロスは「それは恥ずべきことに対しては羞恥であり、称揚すべきものに対しては名誉慾である」¹⁹と語る。そして、「これらを欠けば、都市も、個人も、偉大な、秀美な事業を成就することはできぬからである」²⁰と語る。ファイドロスは、エロスが人に名誉慾を植え付けたが故に、都市が形成され、偉大な事業が成就したと考えている。ファイドロスは、「恋する男は恥ずべき行いをするとところ」や「誰かから恥辱を受けながら、怯懦の故にこれに反撥せぬこととか」²¹が暴露したとき、父親や友人に見られるよりも、愛する人（愛する少年）に見られる方がたまらないと感じている。また愛人（愛する少年）にも同様のことが見受けられる。愛人が恥ずべきことを見られるとき「特に甚だしく恥じるのは愛者に対してである」²²とファイドロスは語る。

¹⁴ ヘシオドス著（廣川洋一訳）『神統記』原初の生成（21ページ12から22ページ5行目）

¹⁵ 上掲書『饗宴』178（56ページ16から57ページ1行目）。

¹⁶ 上掲書『饗宴』178（56ページ6から8行目）。

¹⁷ 上掲書『饗宴』178（56ページ7から8行目）。

¹⁸ 上掲書『饗宴』178（57ページ7行目）。

¹⁹ 上掲書『饗宴』178（57ページ9から10行目）。

²⁰ 上掲書『饗宴』178（57ページ10から11行目）。

²¹ 上掲書『饗宴』178（57ページ12から13行目）。

²² 前掲書『饗宴』178（57ページ16行目）。

エロスは、愛者を勇敢にする²³。しなわち、「エロス自らの与える靈感によって勇気づけられ、その結果生来の最勇者にも比肩し得ようにならぬほど、それほどの臆病者は、一人も無いのである」²⁴とファイドロスは語る。ファイドロスは、「ホメロスが、神はある半神^{ヘーロース}たちに「勇気を吹き込んだ」と語っているところのもの、それこそエロスが彼の賜物として愛者達に与えるものなのである」²⁵と物語る。

1.3 愛者の冥府からの帰還と神エロス

エロスは、愛する人に羞恥、名誉欲、さらに勇気を与えるだけではなく、愛する者だけが恋するための死の覚悟をももたらすとファイドロスは語る。その証拠として、アルケステイスが、彼女の夫への愛の故に、彼女の夫アドメトスの身代わりになって死んだ²⁶ことをファイドロスは挙げ、その夫（フェライ市の王アドメトス）には父親も母親もあったが、「愛の故に夫に対する愛着ははるかに彼らを凌駕していた」²⁷と彼女の夫への愛着をファイドロスは語る。彼女が夫の身代わりに死んだことによって「彼女は人間のみならず神々にすらもきわめて称揚すべき行為をしたものと思われた」²⁸と、また、その行為を為した故に、「その靈魂がふたたび冥府から帰されるというあの榮譽ある賜物を神々から授けられた者はきわめて少数に過ぎないのに」、「彼女の靈魂をば、神々もその行為を驚嘆するあまりに、帰してくれたのであった」²⁹とファイドロスは物語る。アルケステイスが冥府から帰還したのは、彼女のその夫への愛情に突き動かされ、身代わりになって死したが、神々が彼女の魂を上界に帰還させた³⁰とファイドロスは解釈している。

また、アキレウスが彼の無二の親友のパトロクロス³⁰を殺したヘクトルに復讐をし、さらに、その後には、パトロクロスの後を追って死ぬことを選んだ³¹と語り、この行為に対して

²³ ファイドロスは、愛者と愛する少年のみからなる都市あるいは軍隊を例にして、エロスは、愛する人を陋劣から遠ざけ名誉を競って都市を治め、戦いにおいても、エロスは愛する人を勇ましくし、死を恐れさせなくすると語る（前掲書『饗宴』179（59ページ1から10行目）参照）。

²⁴ 前掲書『饗宴』179（58ページ9から10行目）。

²⁵ 前掲書『饗宴』179（58ページ10から12行目）。

²⁶ エウリピデスの『アルケステイス』290, 636を参照。アルケステイスはペリヤスの娘で、フェライ市の王アドメトスの妃であった。

²⁷ 前掲書『饗宴』179（58ページ16から59ページ1行目）。

²⁸ 前掲書『饗宴』179（59ページ2から3行目）。

²⁹ 前掲書『饗宴』179（59ページ4から6行目）。

³⁰ ホメロス著（松平千秋訳）『イリアス（下）』第18歌、78-93、ならびに97-126（198ページ13から199ページ8行目）ならびに（199ページ13から201ページ1行目）参照。

³¹ 前掲書『饗宴』179から180（59ページ12から60ページ2行目）参照。ファドロスは、「アイスキュロスが、アキレウスはパトロクロスの愛者だったようにいっているのは無稽である」と語っている（前掲書『饗宴』180（60ページ2から3行目））。アキレウスはパトロクリスよりも年下であったことから、パトロクロ

「神々もまた非常に彼を嘆賞して、その愛者をそれほど深く愛重したというので、これに抜群の栄養を与えたのである」³²と説明している。ファイドロスは、「神々は実際愛から出た徳をもっとも貴しとする。しかもかれらがさらにいっそう嘆美し、尊重しかつ恩恵を与えるのは、愛者がその愛する少年に対するときよりも、むしろ愛される者が愛する者に対して愛情を示すときである」³³と説明している。この故に、神々はアキレウスを「福者の島」へ送ったと、ファイドロスは語る。

これに対し、彼の妻エウリュディケが死んで冥府に墜ちたとき、オルフェウス³⁴は、彼の妻をこの世（上界）に連れ戻す許可を冥府の神々から得たが、ただその条件は彼の妻を上界に復帰させる際に振り返ってはいけないというものであったが、彼はその約束を違えたために、彼は彼の妻を上界に連れ帰るという目的を果さずに冥府から引き返すこととなった。ファイドロスは、オルフェウスが目的を達し得なかったのは、「彼が争われぬ^{キタロートス}弾琴者流の柔弱者として見られ、またアルケステイスのように愛のために死ぬ勇猛心無く、ただ生きながら冥府に侵入しようとして狡智を弄したからである」³⁵と説明している。ファイドロスは、オルフェウスには愛のためにする勇猛心が欠けていると見ている。

ファイドロスは、徳と幸福との獲得に当たっては生前死後を通じて人類にとってもっとも権威ある指導者であると神エロスを説いている。

第2節 パウサニヤスの演説

2.1 エロスは唯一つか

パウサニヤス(Παυσανίας, Pausanias)³⁶は、ファイドロスはその演説においてエロスが唯一つかないものとしたが、エロスが唯一種類では無いことを示し、さらにそれぞれのエロス

スが愛する者であったと見るのが常識的である。

³² 前掲書『饗宴』180 (60ページ1から2行目)。

³³ 前掲書『饗宴』180 (60ページ6から8行目)。愛される者(アキレウス)が愛する者(パトロクロス)のために命をかけたことから、エロスを讃美しているが、実際、パトロクロスとアキレウスの間には友情以上のものがあつたと判断することができないように思われる。ファイドロス(パイドロス)のレトリックにすぎないのでは無からうか。

³⁴ オルフェウスは、オイアグロス(或いはアポロン)とムーサ女神カリオペとの間の子であった。またオルフェウスは、トラケの歌人かつ音楽家であった。

³⁵ 前掲書『饗宴』179 (59ページ9から11行目)。ここでファイドロスは、オルフェウスを弱々しいキタロードスの奏者としているが、これはオルフェウス伝説を意図的に変更していると思われる。

³⁶ パウサニヤスについて、プラトンの『プロタゴラス』では、「パウサニヤスがそばの寝椅子に腰をおろし、パウサニヤスとならんで、まだうら若いひとりの少年がいた。この目に狂いがなければ、すぐれて立派な天性をもった人とみだが、とにかく顔だちの美しいことのほうは間違いなしだ。名前はアガトンと聞いたように思うが、これがパウサニヤスの想いを寄せる若者だったとしても、いっこうに不思議はないだろう」と紹介されている(プラトン著(藤沢令夫訳)『プロタゴラス』315DからE(28ページ5から8行目))。

の特徴を示し、どのエロスを讃美すべきかについて演説する。エロスが唯一つでは無いならば、いかなる種類のエロスを讃美すればよいのか。この節では、このことについて考察する。はじめに、どのエロスを讃美すべきかを明らかにする。次に、そのエロスの神にふさわしい人を讃美する。

パッサニヤスはエロスを分ける³⁷。それは、アフロディテに二種あるからであると彼は言う。すなわち、彼は、アフロディテを、万人向けのものとしてと天上のものとして分割する。前者は、年長で、母の無い、ウラノス神（天）の娘で、天の娘であって、もう一方の年下の方は、ゼウスとディオネの間の娘で、これを万人向きのもの（パンデモス）と名付ける。彼は、後者のアフロディテに従うエロスを万人向きのものと呼び、前者のアフロディテに従うエロスを天上の向きのもの（天上のもの（ウラニオス））呼び、次に、各々のエロスの特性を明らかにする。エロス自体には色も無く臭いも無いが、そのエロスのもたらす行為・行動がそのエロスの特性を決める。万人向けのアフロディテに属するエロスは真に万人向けで、この種のエロスに支配される人の愛は、第一に、少年に対すると同様に、婦人にも向けられ、恋に落ちた場合には、彼らは魂より以上に肉体を愛し、最後には、できうる限り曖昧な者を愛する。このようにパッサニヤスは、万人向けのエロスを規定する。このエロスが、「ただ目的の達成のみ眼中に置いて、その仕方が立派かどうかを意に介しないからである」³⁸とパッサニヤスは説明する。だから、「この種の人、何事でも、それが善であろうと、その反対であろうと無差別に、ただ偶然のまにまに行うようになるのである」³⁹と、また、このエロスが「その生まれの上からも女性と男性とにあずかる女神から出ているからである」⁴⁰とパッサニヤスは語る。

もう一方のエロスは、天の娘からでたものであるが、このエロスの特性について、パッサニヤスは次のように説明している。この神は、「第一には、女性にあずからず、ただ男性のみにあずかり（これすなわち少年に対する愛である）、次には年長で、放縦に流れることがない」⁴¹とパッサニヤスはその特性を説明する。故に、この特性から、このエロスに鼓舞された者は、男性に向うが、このエロスが男性に向かう理由を、「生来強き者と理性に富める者とを愛好するからである」⁴²とパッサニヤスは解釈する。彼は、エロス神を理性に富める強きも

³⁷ エロスを二つに分けるには、アフロディテが二種であるからである。アフロディテは、愛と美の神であった。パッサニヤスは、オリンポスの12神のひとりであるアフロディテを立てエロスを讃美する点では、ファイドロスの原始神のエロスを讃美するのとは異なっている。

³⁸ 前掲書『饗宴』181（62ページ10行目）。

³⁹ 前掲書『饗宴』181（62ページ11から12行目）。

⁴⁰ 前掲書『饗宴』181（62ページ13行目）。

⁴¹ 前掲書『饗宴』181（62ページ14から16行目）。

⁴² 前掲書『饗宴』181（63ページ1行目）。

のを愛する神として解釈する。また、もう1つの特性を上げているが、それは少年愛もこのエロスに動かされるということである。パウサニヤスは、少年愛においても、エロスに純粋に動かされる者を人は識別できると説いている。髭の生え出す頃から愛し始める人は、「全生涯を通じてその愛する者から離れ去ることなく、いつまでもこれと生活を共にする覚悟こそあれ、子供の時の無思慮に乗じて手に入れた愛人を欺いて、嘲笑をもってこれを捨てて他に走るようなことはしないに違いない」⁴³と思われる。それでも、少年の将来は未定であり、愛者を欺く人に成長するかも知れないし、また愛者を捨て去る人に成長するかも知れないと語る。

このような少年に多大の労苦を徒費することを未然に防ぐために、「この種の少年愛を禁ずる法律さえも布かれていなければならぬ」⁴⁴とパウサニヤスは語る。少年が劣悪な者あるいは優良な者に成長するかが不確実であるからである。実際、「愛に悪評を負わせ、愛者の意に従うのは恥辱であるとの主張をあえてする者が少くなくないほどまでに至らしめた」⁴⁵卑俗な愛者にも強制する必要性をパウサニヤスは主張している。これらの人に少年愛を禁止することについては、「実際世に節度と掟とに従って行われる事は、決して正当に非難せられるはずはないのである」⁴⁶とパウサニヤスは言い切っている。

2.2 愛者に従うこと：醜悪・恥辱か

パウサニヤスは、少年愛が恥（恥辱）かあるいは誉れかについて、社会的慣習・法律の視点から検討し、美しい仕方で愛されるか、醜い仕方で愛されるかによって、少年愛を判断することを説いている。

パウサニヤスは、少年が愛者に従うことが恥であるか否かについて判断する前に、他の国の事情を見ることから始めている。たとえば、エリスやラケダイモンなどの弁舌の拙い地方では、「愛者の意に従うことを善美とする慣習が文句無しに行われ、そうして若きと老いたるとを問わず何人もそれを醜悪と呼びはしない」⁴⁷と語っている。一方、「イオニヤの諸地方やその他のヘラス人が異邦人の支配下に立つ地域においては至る所、それは恥辱と見做されている」⁴⁸と語っている。僭主政治の行われていた小アジアの沿岸地域では、僭主政治の立場から、智慧の愛求や体育の愛好と同様に、愛者に従うことは恥辱と見られていた。という

⁴³ 前掲書『饗宴』181 (63ページ4から7行目)。

⁴⁴ 前掲書『饗宴』181 (63ページ8行目)。

⁴⁵ 前掲書『饗宴』181から182 (63ページ13から14行目)。

⁴⁶ 前掲書『饗宴』182 (63ページ16から64ページ1行目)。

⁴⁷ 前掲書『饗宴』182 (64ページ4から5行目)。

⁴⁸ 前掲書『饗宴』182 (64ページ7から8行目)。

のは、強固な友情や団結によって僭主政治が倒されるかもしれないし、愛者に従った者達が僭主政治を打倒する⁴⁹かもしれないからであった。「愛者の意に従うことが恥辱と定められている所では、このような慣習を導入した者の卑劣の結果として—すなわち統治者の権勢慾と被治者の怯懦との結果として—そう定められているのである」⁵⁰とパッサニヤスは説明する。

それに対して、愛者の意に従うことは、確実に美しい事として容認されていたところでは、そのような「慣習を導入した者の精神的懈怠によってそうなったのである」⁵¹とパッサニヤスは説明する。彼はアテナイ市において愛者の意に従うことが美しい習慣として行われていると認識し、その習慣がとられていることを説こうとしている。

2.3 愛者の誉れと恥辱

パッサニヤスは、少年愛が美しい事であると言い切るためには、さらに熟慮すべきことがあると説いている。パッサニヤスは、愛することは美しい事で、「明らかに愛するのはひそかに愛するよりも美しく、しかももっとも高貴にもっとも優秀な者を—たとい彼が他のものよりは面貌が醜いにせよ—愛するのは特に美しいといわれていることを、さらにまた、万人が恋する者に与えられる異常なる—しかし何か醜悪な行いのあった者には決して与えられぬごとき—鼓舞を」⁵²かつ、「恋愛における成功は^{カロン}誉とせられるが、その不成功は恥辱とせられる慣習はさらにその勝利者となるためならば異常事を行うあらゆる自由を愛者に与え、しかもそれに対して賞讃を受けることをすら許している」⁵³が、パッサニヤスは少年愛について熟思すべきことがあると主張している。

というのは、愛する行為は、誰かが愛することを装って、別の目的（美しいものを愛すること）を達成しようと企て、故意に愛する行為をとったとしたならば、そのような行為は非難を招くことになるであろう。パッサニヤスによると、「今かりに誰かから金銭を得たいとか、重要な官職またはその他の勢力を獲得したいとかいうような意図から、普通愛者がその愛する少年に対してすると同じ事をあえてしようとしたならば」⁵⁴、そのとき「彼はこのよう

⁴⁹ 前掲書『饗宴』182（64ページ13から14行目）に、「アリストゲイトンの愛とハルディオスの確乎たる友情とはついに彼らの主権をも倒壊するに至らしめたのだった」とある。

⁵⁰ 前掲書『饗宴』182（64ページ14から16行目）。少年愛が僭主政治を打倒することを避けるために、僭主たちによって導入されたパッサニヤスは見ている。多分、プラトンも僭主政治には批判的であると見ていいのであろう。

⁵¹ 前掲書『饗宴』182（65ページ1から2行目）。

⁵² 前掲書『饗宴』182（65ページ5から9行目）。

⁵³ 前掲書『饗宴』182（65ページ9から11行目）。

⁵⁴ 前掲書『饗宴』183（65ページ13から15行目）。

な振舞を友人からも敵からも阻止されるであろう。すなわち、後者はその阿諛と奴隷根性とを罵詈し、前者は彼に忠告を与えかつ彼の行為を自らの恥とするに相違ないからである⁵⁵と説明され、そうであるにもかかわらず、「愛者である場合には、世人は彼に好意を寄せ、また慣習からは、いともいみじき業を果す者であるかのように、何の非難を受けることもなくそれを為すことを許されているのであるが、さらに奇怪至極なのは、多衆のいうところに従えば、その立てた誓を破った場合にも、ただ愛者に対してのみは神々からの赦が出るということである⁵⁶と社会的に少年愛は看做され扱われる。パウサニヤスは、「神々も人間も、愛する者にはあらゆる自由を賦与しているのである⁵⁷と説明し、「この国においては愛することと愛者の友となることとは無上の美事と認められている⁵⁸と結んでいる。

アテナイのエロスを讃美する習慣を紹介しているが、他方では、愛者は寛大に取りなしされるかたわら、一方では、愛人(少年)の父親達は少年達に監督者を付けて「その愛者と言葉を交えることを許さず、また監督者もこれについては厳命を受けている⁵⁹だけではなく、また「同年輩者や仲間の者達も、そういう場面を発見すれば、これに非難を加え、しかも他方これらの非難者はその言を不当として年長者から阻止されたり叱責されたりすることが無い⁶⁰と彼の認識を語る。この事実から、先に述べた愛者を異常までに厚遇する慣習(アテナイの慣習)とは逆に、愛者が愛人と言葉を交わすことは、禁止され、非難される事実から、「かかることはここでは恐らく至大の恥辱と認められている⁶¹と結んでいる。

このアテナイの慣習の考察から、パウサニヤスは、少年愛自体が美しいとか醜いと判断するのではなく、その愛する仕方から判断することをパウサニヤスは主張する。

2.4 愛者に寛大な慣習か、それとも禁止され非難される慣習か

愛者と愛人の交際(言葉を交わすことなど)を寛大にとりなす慣習を選択するか、あるいはそれを禁止・非難する習慣を選ぶかは、簡単明瞭ではないと、パウサニヤスは考えているが、彼は、愛する者の行為が美しいか、あるいは醜いかをその愛する仕方から判断することを主張している。

彼の結論として、「美しい仕方では為されたことが美しく、醜い仕方では為されたことが醜いのである⁶²と語る。醜い仕方では為されることは悪しき者の意に従い、さらに悪しき仕方では

⁵⁵ 前掲書『饗宴』183 (66 ページ 1 から 3 行目)。

⁵⁶ 前掲書『饗宴』183 (66 ページ 4 から 7 行目)。

⁵⁷ 前掲書『饗宴』183 (66 ページ 8 から 9 行目)。

⁵⁸ 前掲書『饗宴』183 (66 ページ 10 から 11 行目)。

⁵⁹ 前掲書『饗宴』183 (66 ページ 11 から 12 行目)。

⁶⁰ 前掲書『饗宴』183 (66 ページ 12 から 14 行目)。

⁶¹ 前掲書『饗宴』183 (66 ページ 15 から 16 行目)。

うこと、一方、美しい仕方で為されるとことは良き者の意に従い、さらに良き仕方で従う⁶³と、彼は主張する。パッサニヤスは、「悪しき者とは魂よりもさらに多く肉体を愛するかの卑俗なる愛者をいう。しかもその愛するのは永続する対象ではないから、彼自らもまた永続するはずがない」⁶⁴と語る。また「気高き性格を愛する者は生涯を通じて変ることがない、それは永続するものと融合しているからである」⁶⁵と語る。「わが国の慣習も、それだから、これらの者をよくまた厳正に吟味して、一方の意には従い、他方からは遁れることを要求する」⁶⁶と語る。愛する者と愛される者とが良き者か悪き者かを厳正に吟味することを彼は主張している。

アテナイの慣習は、美しい仕方でなされる行為者を追い求め、他の醜き仕方でなされる行為者から逃げ去るように励まし、その結果、愛する者が良き者か悪しき者か、また愛される者がそのいずれに属するかを決定する⁶⁷、すなわちアテナイの慣習は、愛する者ならびに愛される者が良き者に属するか否かをみて、その後いずれかを決定する。その試みの結果から「あまり早く説得されるのが恥辱と認められる」⁶⁸、また「金銭や政治的権力のために説得されるのも恥辱とせられる」⁶⁹とパッサニヤスは彼の結論を引き出している。パッサニヤスは、「わが国の慣習に従えば、愛された少年が美しき仕方で愛する者の意に従おうとすると、残された途はただ一つしかあり得ない」⁷⁰と言い、そして「愛者の場合に、愛する少年のためには自ら進んでいかなる奴隸的服従に甘んじて、それは阿諛ともまた屈辱とも看做されなかったとちょうど同じように、ただもう一つの自発的な奴隸的服従だけが屈辱でないと認めている、徳のためにするものすなわちこれである」⁷¹としてその慣習を語っている。

パッサニヤスは、美しい仕方で少年が愛する者に従うならば、愛する者の少年に対する奴隸的服従に甘んじて、そのことは屈辱ではないと主張している。

⁶² 前掲書『饗宴』183（67ページ2から3行目）。

⁶³ 前掲書『饗宴』183（67ページ3から4行目）参照。

⁶⁴ 前掲書『饗宴』183（67ページ5から6行目）。

⁶⁵ 前掲書『饗宴』183（67ページ8から9行目）。

⁶⁶ 前掲書『饗宴』184（67ページ9から10行目）。

⁶⁷ 前掲書『饗宴』184（67ページ10から12行目）参照。

⁶⁸ 前掲書『饗宴』184（67ページ13から14行目）。

⁶⁹ 前掲書『饗宴』184（67ページ15行目）。すなわち、金銭のためないし政治的成功のために恩恵を蒙ることが屈辱ではないとしても、そこから高尚な友情などは生まれ得ないし、さらに鞏固なものまたは永続するものが存立しないと思われるからだと、パッサニヤスは説いている（前掲書『饗宴』184（67ページ16から68ページ3行目）参照）。

⁷⁰ 前掲書『饗宴』184（68ページ3から4行目）。

⁷¹ 前掲書『饗宴』184（68ページ5から8行目）。

2.5 二種の慣習の結合

パッサニヤスは、二種の習慣の総合化によって、エロスを讃美する。二種の習慣とは、少年愛と愛智に関することである。少年を愛する人の意向と愛される少年の意向がマッチする格率（行為の規則）の実現をパッサニヤスは主張している。

愛者が自身の智慧あるいは徳の向上に導くとの信念に基づき奉仕する場合には、「この自発的な奴隷的服従は屈辱でもなければ阿諛でもない」⁷²と主張する。他方、愛される少年がその愛者に好意を示すことは結局称賛に値するものであることを明らかにしようとするならば、「二種の慣習を一すなわち少年愛に関するものと愛智およびその他の徳に関するものを一互いに結びつけなければならぬ」⁷³とパッサニヤスは主張する。両者のおのおの自身の格率に従い、前者は己に好意を示す少年に対していかなる奉仕をも厭わない、後者は自分を賢明かつ優良な者にしてくれる人に対していかなる奉仕も敢えてするとき、「かくこの両格率が一つに結合したとき、ただその時にのみ愛された少年が愛者に好意を示すことの誉れとなる場合が実現するのである、他の場合には絶無なのである」⁷⁴とパッサニヤスは説明する。両格率が結合するときには、譬え欺かれようとも恥辱ではないが、他の場合には、いずれにもそれは恥辱である。

「徳のために好意をしめすことはいかなる場合にも美しい。これがすなわち天上の女神に属するエロスで、また自らも天上界の者（ウラニオス）であり、かつ国家にとっても、個人にとっても多大の価値を有するものなのである、このエロスは、愛する者にも愛される者にも、徳を進めるために真剣に自分自身を顧慮することを余儀なくするからである」⁷⁵と説明し、そして「他種のエロスはすべてこれとは異なる万人向きの女神に属する」⁷⁶と説明する。

パッサニヤスは、ファイドロスに対して、二種類の神エロスがあり、天上の女神に属するエロスに向かうことによって、国家も家も善あるものに近づくと説いている。あらゆるエロスが国家や家を善いものにしようとするパッサニヤスは説きそして讃美している。また、パッサニヤスは、エロスをアフロディテの神霊と位置づけているが、これはソクラテス（すなわちプラトン）の方法と同じである。すなわち、神とその使いとしてのデーモン（神霊としての神の使い）を考えている。

⁷² 前掲書『饗宴』184（68ページ11行目）。

⁷³ 前掲書『饗宴』184（68ページ13から14行目）。

⁷⁴ 前掲書『饗宴』184（69ページ4から5行目）。

⁷⁵ 前掲書『饗宴』185（70ページ2から5行目）。

⁷⁶ 前掲書『饗宴』185（70ページ5から6行目）。

第3節 エリュキシマコスのエロス讃美の演説：汎神論

3.1 医術からのエロス；エロスは一切の上に勢力を張る

エリュキシマコス（エリュクシマコス）⁷⁷も二種類のエロスが存在することには異論がないといい、その上で、彼は、「エロスは単に美しき少年に対する愛として人間の魂の内に存在するのみならず、また他の多くのものに対する愛として、かつ他の事物の内にもあるもので、一切の動物の体内にも、大地の産出する植物の内にも、否、いわばありとあらゆる物の内に存在する」⁷⁸と語り主張している。エロスは、少年に向けられた愛のみとして人間の魂の内にあるのではないというのが彼の主張である。

彼は、医術の観点からエロスを讃美し、肉体の健康状態におけるエロスと病弱状態におけるエロスの二種類があると語る。一つは「すべて肉体のうちの優良素と健全素の意に従うのは美しくかつ義務に適う」⁷⁹と語り、これに反して「不良素と病素に従うのは恥辱であり、いやしくも専門家をもって任ずる者は、その意に従わぬことを義務とする」⁸⁰という主張であった。医術を「充足と排泄とに関して体内に起る^{エロテイカ}愛的現象の知識である」⁸¹と規定し、そして「良き愛と悪しき愛とをよく識別し得る者、そういう者こそ医術にもっとも明るい人なのである」⁸²とエリュキシマコスは語る。実際、名医は「体内の最も不和なるものを互に親和し相愛するにいたらしめ得る者でなければならない」⁸³と語る。

彼は、エロスが人間のことだけでなく神々ごとの一切のあらゆるものにその勢力を張ると主張する。体育や農業に、音楽にも、その勢力を張っていると見ているエリュキシマコスは、エロスの活動を「全自然と芸術との裡にも支配する一原理として認める」⁸⁴ものであるという考えを主張している。この意味で、彼のエロスの讃美は、全宇宙的であると言えよう。始めに音楽とエロスの関係についての彼の見解を見てみよう。

⁷⁷ エリュクシマコスと彼の父アクメノスについては、プラトン著（藤沢令夫訳）『パイドロス』268B（116ページ6行目）で言及されている。エリュクシマコス父子は当時アテナイ（ギリシア）を代表する医者であった。『パイドロス』では、プラトンは、医術と言論の技術の違いを示すことを目的に、エリュクシマコス父子を登場させている。

⁷⁸ 前掲書『饗宴』186（71ページ7から9行目）。

⁷⁹ 前掲書『饗宴』186（72ページ2行目）。

⁸⁰ 前掲書『饗宴』186（72ページ3から4行目）。

⁸¹ 前掲書『饗宴』186（72ページ5行目）。

⁸² 前掲書『饗宴』186（72ページ6から7行目）。

⁸³ 前掲書『饗宴』186（72ページ10から11行目）。

⁸⁴ 前掲書『饗宴』の序説の筆者である久保勉氏による（前掲書『饗宴』序説（17ページ5行目））。

3.2 音楽とエロス

エリュキシマコスホモノイヤは、すべてのものに協和をもたらすのは「相互の間に愛と和合ホモノイヤとを喚起するところの音楽である」⁸⁵と言う。そして「音楽もまた、諧調と節奏との領域における愛的現象エローテイカに関する学である」⁸⁶と語る。ここで、諧調ハルモニヤ⁸⁷とは和音シュンフォーニヤのことで、和音はまた一種の協和ホモロギヤである。また節奏リュトモスは、速と緩の協和から生じるのである。音楽もエロス現象であると、エリュキシマコスは主張している。

しかし、実際に「節奏と諧調とを人間の間に適用せねばならぬ場合には、一いわゆる作曲メロポイイヤに従事する作家としてであっても、あるいはでき上った曲や韻律を誤りなく演出する（これが芸術的教養バイデイヤと呼ばれるものである）実演家としてであっても—その場合には事はすぐに困難になり、堪能なる老練家を必要とするようになるのである」⁸⁸と、「端雅な人々に対しては—しかもいまだその域に到らぬ者をいっそう端雅に近づけるために—好意を示しそうして彼らの衷うちの愛を護らなければならぬということである」⁸⁹とエリュキシマコスは語る。「これこそ天上の者なる、かの美しきエロス、ムーサなる天の娘の属する者なのである。これに反してポリュムニヤに属するエロスは万人向きのもので、これを適用するに当っては慎重に適用しなければならぬ。快樂はこれを享受して、しかも放縦に流ることなきように」⁹⁰とエリュキシマコスは語る。

音楽においても、両種のエロスに注意を払うことをエリュキシマコスは主張している。

3.3 天文学（含む気象学）とエロス

エリュキシマコスは、季節の交替や天体の運動などに関する学を天文学と呼んでいる。霜や霰あられや霰なども「愛現象におけるこれらの事物の相互関係の不権衡と無秩序とから発生するのである」⁹¹とエリュキシマコスは主張する。ここでも彼は二種のエロスが作用するとみている。冷たきものと暖かきものと、乾けるものと湿れるものとの「対立の相互関係の中に端雅な愛が加わり、そうして調和と混合とが適度を保ちえたならば、そのとき人間にも動物や植物にも繁栄と健康とがもたらされる。そして禍害は全然跡を絶つのである」⁹²とエリュキ

⁸⁵ 前掲書『饗宴』187（73ページ14行目）。

⁸⁶ 前掲書『饗宴』187（73ページ15行目）。

⁸⁷ 諧調は、高音と低音の協和することである。諧調は、初めには抗争していた高音と低音とが、後に音楽技術によって協和させられて生じたものである。

⁸⁸ 前掲書『饗宴』187（74ページ1から4行目）。

⁸⁹ 前掲書『饗宴』187（74ページ5から7行目）。

⁹⁰ 前掲書『饗宴』187（74ページ7から9行目）。

⁹¹ 前掲書『饗宴』188（75ページ5から6行目）。

⁹² 前掲書『饗宴』188（74ページ15から75ページ2行目）。

シマコスが説明する。それに対して、「放縦なエロスが季節の上に決定的な勢力を振うようになれば、多くのものは滅ぼされまた害われる。実際、この状態の下では疫病やその他の動植物を襲う種々の病気がおびただしく発生しがちなのである」⁹³と語る。

対立する、乾きや湿りあるいは暖かきものと冷たきもの間に愛が加わることによって調和と混合が適切にたもたれるならば、健康と繁栄がもたらされ、禍害は完全に消滅するとエリュキシマコスは主張し、エロスの恩恵を讃えている。

3.4 敬虔と不敬虔：神々と人間の間でのエロスの威力

一切の不敬虔が発生するのは、「人が端雅なるエロスの意に従わず、またあらゆる行動において彼を尊びかつ重んずることをもせず、生前または死後の両親に対する態度においても、神々に対する態度においても、他のエロスを尊重する場合であるからである」⁹⁴とエリュキシマコスは主張する。ここで他のエロスとは放縦なエロスのこと示している。それゆえに、「ト占術に負わされた努めは両種の愛を監視しまた治癒することである。さらにまた、ト占術は神々と人間の友愛関係の創造者である」⁹⁵と語る。ト占術は、神々と人間との友愛関係の創造者であり、神の掟と敬虔に関するかぎり、人間社会における愛現象についてよく知っていたと、エリュキシマコスは述べている。

エリュキシマコスは、エロスの威力はあらゆる領域に及んでいると考えていたと思われる。「ソフロシューネー「克己」と公正との精神をもって」⁹⁶、善事のために、われわれの間にも神々の間にも尽力するエロスこそ、最大の威力をもつのである。また、このエロスは、われわれにあらゆる福祉を与え、人間のみならず、神々とも交わらしめ、これと友となれるようにするとエリュキシマコスは主張している。

エリュキシマコスは、二種類のエロスが宇宙全体で支配し、エロスを人間や国家社会での愛現象だけでなく、動物界や生物界を包括する全世界にまで拡大していると主張している。このようなエロスの取り計らいはプラトン自身の目指すところでもある。

第4節 アガトン⁹⁷ならびにアリストファネスのエロス讃美の演説

4.1 エロスの性質

これまでの演説者はエロスの性質ではなく、エロスの賜物あるいはその効能を説くもので

⁹³ 前掲書『饗宴』188（75ページ2から4行目）。

⁹⁴ 前掲書『饗宴』188（75ページ10から13行目）。

⁹⁵ 前掲書『饗宴』188（75ページ13から14行目）。

⁹⁶ 前掲書『饗宴』188（76ページ1行目）。

⁹⁷ アガトン（Ἀγάθων, Agathōn,）（前448年頃-前400年）の古代ギリシアの悲劇作家であった。プラトンの

あったが、アガトンはエロスの性質を説いて、その後、その特性を讃美することを試みたのであった。

アガトンは、エロスの本質については、すべての神の中で「もっとも美しく、もっとも優れており、したがってまたもっとも福^{さいわい}なる神である」⁹⁸と語る。その理由として、アガトンは、エロスの神が、神々の中では最も年少である⁹⁹と説いた。アガトンは、エロスが迅速な老齢から逃げ去り、本来、老いを忌み嫌い、そして青年と共にある¹⁰⁰と語る。似たものは似たものに近づくという諺から、アガトンはエロスが年少な神であるという性質を持つと結論している。この見解は、エロスは最古の神であるというファイドロスの見解とは真逆である。

アガトンは、エロスがクロノスやイヤペトスよりも年長であったという説には異を唱えている。というのは、もしその時代にエロスがいたならば、神々の間で互に去勢し合う事はなかったであろうとアガトンは語る。「エロスが神々に君臨し始めて以来は、現今のごとく友情と平和とが支配したであろう」¹⁰¹と、そして「エロスはもっとも若く、もっとも柔軟な者である」¹⁰²とアガトンは主張する。その証拠として、エロスは心の中に、魂の内に宿り、さらに柔軟さをもった者の心・魂の内に棲む¹⁰³のであって、決して粗硬な心情・魂の内に居座ることはないと語る。その故に、エロスの姿はしなやかであり、その物腰は優雅であるとアガトンは語る。

エロスは、その性質から、柔らかなものの上を歩みそこに宿ることができる、それ故に、いずれの魂にも忍びこむことができると、アガトンは説いている。

4.2 エロスと徳ならびに智慧

アガトンがエロスの徳の中で最も特筆すべき点として上げていることは、エロスが、不正を加えず、不正を受けることもないということである。すなわち、エロスは公正であることを意味する。このことについて、アガトンは、「いずれの神にたいしてもまたいずれの神からも、いずれの人に対してもまたいずれの人からも」¹⁰⁴と語る。

『饗宴』の舞台は、アガトンが最初の悲劇の優勝（前416年）を祝して催された饗宴という設定である。アガトンの名前は、アリストテレス（松本仁助・岡道男共訳）の『詩学』第9章と第18章にも言及されている。

⁹⁸ 前掲書『饗宴』195（88ページ15から89ページ1行目）。

⁹⁹ 前掲書『饗宴』195（89ページ2から3行目）参照。

¹⁰⁰ 前掲書『饗宴』195（89ページ3から6行目）参照。

¹⁰¹ 前掲書『饗宴』195（89ページ13から14行目）。

¹⁰² 前掲書『饗宴』196（90ページ13行目）。アガトンは、ホメロスから、アテネ女神の柔軟さを引いている。

¹⁰³ 前掲書『饗宴』195から196（90ページ4から12行目）参照。

¹⁰⁴ 前掲書『饗宴』196（91ページ8から9行目）。

勇気については、アガトンは、戦いの神アレス（アレース）はエロスに取り押さえられるので、「アレスさえ敵ではない」とアガトンはエロスの勇気・勇敢さを讃えている。次に、アガトンはエロスの智慧について語る。アガトンは、エロスについて、「この神は、巧妙なる詩人である。他をもまた詩人にするほどである」¹⁰⁵と、またエロスは、「第一には自らももっとも美しくももっとも優れたる者、次には他の者にもまた同じような長所を賦与する者と思われる」¹⁰⁶とアガトンは主張する。エロスが触れた者はきっと詩人になるのであるが、これは、「エロスが総じてあらゆる芸術的創作において優れたる創造者であることの証左とするに足る」¹⁰⁷とアガトンは讃える。

またその他の芸術においてもエロスはその師であると言い、「射術や医術や予言術を、アポロンが発明したのは、欲求と愛とに導かれたためである。したがってこの神もまたエロスの弟子である」¹⁰⁸と語る。さらに、「音楽におけるムーサ神達や、鍛冶術におけるヘファイストスや、機織法におけるアテナや、また「神々と人類との統治」におけるゼウスもまた同様である」¹⁰⁹とアガトンは語る。このことから、アガトンはエロスが神々の世界に入り込み、「始めて秩序が立ったのである」¹¹⁰と説く。

アガトンは、自身のエロス論を次のように纏めている。すなわち、エロスについて、アガトンは「第一には自らももっとも美しくももっとも優れたる者、次には他の者にもまた同じような長所を賦与すると思われる」と総括している。

4.3 アガトンの演説についてソクラテス（すなわちプラトン）の問いかけ

ソクラテスは、アガトンの演説について、美しく綺麗で、「今の演説は僕にゴルギヤスを思い出させる」¹¹¹と感想を語っている。ソクラテスは、エロスを讃美すると約束した事について後悔し始める。というのは、ソクラテスは、なにを讃美するべきかについて、「まるで知らない癖に、自分は愛の事には通じていると主張した」¹¹²ことを後悔していた。というのは、ソクラテスは何かを讃美するためには、「これについての真実を語らなければいけない。そうしてそれが先要条件だ」¹¹³と考えて、そして次に、「真実そのものの中からもっとも美しい

¹⁰⁵ 前掲書『饗宴』196（92ページ11から12行目）。

¹⁰⁶ 前掲書『饗宴』197（93ページ12から13行目）。

¹⁰⁷ 前掲書『饗宴』106から107（92ページ13から14行目）。

¹⁰⁸ 前掲書『饗宴』197（93ページ3から4行目）。

¹⁰⁹ 前掲書『饗宴』197（93ページ5から6行目）。

¹¹⁰ 前掲書『饗宴』197（93ページ7行目）。

¹¹¹ 前掲書『饗宴』198（95ページ11行目）。

¹¹² 前掲書『饗宴』198（95ページ16行目）。

¹¹³ 前掲書『饗宴』198（96ページ1から2行目）。

ものを選びだしてできるだけ秩序よく按排しなければならぬ¹¹⁴と考へて、立派な演説ができるかと自惚れていた。ソクラテスは「物を讚美する真の方法をよく解していると信じていた」¹¹⁵のであった。

ところが、実際にソクラテスの方法は物を讚美する仕方ではなく、物が真実であるかどうかに関係なく、「ただその対象に考えられるかぎりのもっとも大きく、もっとも美しい性質をくっつけばいいのだった。もしまだそれが間違いでも、そんなことは少しも構いはしない」¹¹⁶と語り、めいめいの演説者の姿勢は、「本当にエロスを讚美しようということではなくて、ただ讚美する者のように見せかけようこと」¹¹⁷であったと気づくのであった。ゆえに、「ありとあらゆる語句を持ち出して来て、これをエロスに帰して、彼はかくかくの性質を持ちまたこれほどたくさんの賜物を授け」¹¹⁸、エロスを「もっとも美しいかつもっとも優れた神のようにみせかけようとする」¹¹⁹と語った。そのときに、讚美演説は美しくも莊重にもなると見られたのである。

ソクラテスとアガトンの間で、エロスに関して意見の一致が見られたことがある。それは「エロス(愛)とは、まず第一に、何かに対して、次には現に欠乏を感じているものに対して、存在するもの」¹²⁰についての点では意見が一致していた。「エロスとは何に対するものかといったかを」¹²¹想起することをソクラテスはアガトンに求めた。結局、二人は「エロスとは美に対する愛で、醜に対するものではない」¹²²ことについて同意したことになる。

4.4 エロスの讚美：アリストファネスの演説から

喜劇¹²³作家のアリストファネス (Ἀριστοφάνης, Aristophanēs) (前446年頃生-前385年頃

¹¹⁴ 前掲書『饗宴』198 (96ページ2から3行目)。

¹¹⁵ 前掲書『饗宴』198 (96ページ5行目)。

¹¹⁶ 前掲書『饗宴』198 (96ページ7から9行目)。

¹¹⁷ 前掲書『饗宴』198 (96ページ10から11行目)。

¹¹⁸ 前掲書『饗宴』198 (96ページ11から13行目)。

¹¹⁹ 前掲書『饗宴』199 (96ページ13から14行目)。

¹²⁰ 前掲書『饗宴』200 (101ページ14から16行目)。

¹²¹ 前掲書『饗宴』201 (102ページ2行目)。

¹²² 前掲書『饗宴』201 (102ページ8行目)。

¹²³ プラトンは、劇作家の代表としてアガトンとアリストファネスのエロスを讚美する見解を取り上げている。アガトンは悲劇、アリストファネスは喜劇の代表として取り上げている。カントは、悲劇と喜劇の違いについて、その見解を述べている。「悲劇と喜劇との相違は、主として前者に於いては崇高に対する感情性が、後者に於いては美に対するそれが動かされる点にある。悲劇に於いては、他人の幸福のための宏量な犠牲、危険の際に於ける勇敢な決意、試煉に堪へた信實などが現はれる。其處では愛は陰鬱で、優しく、尊敬に充ちたものである。他人の不幸が観者の胸中に同情を喚び、其宏量な心を他人の苦惱のためにとどろかせる。観者は穩かに揺がされ、自己の本性の尊嚴を感じる。これに対して、喜劇はうまい奸計と奇怪な混乱と、困

没) もエロスを讃美している。彼は、エロスの威力が十分にこの世では理解されていないと言って、エロス神を敬い讃美することを説いている。彼によると、人間を愛する者としてのエロスは、引き裂かれた一体であった人間に相互に求めさせるものがエロスである。

彼は、「エロスは神々のうち人間の最大の友である」¹²⁴、すなわち、人類の助力者かつ苦悩の医者であると説き、神エロスの威力を明らかにするために、まず人間の本性が三種であることから語り始める。男性、女性ならび男女(両者の結合せるものであった)の三種¹²⁵であった。「各人の姿は全地球形を呈して、背と脇腹とがその周囲にあった」¹²⁶と説明する。彼らは、球状をなしていた、そのため力強く、気位の高さゆえに、人間は神々に挑戦するようになった。

冒瀆された神々の長(ゼウス)は、人間を一人残らず真二つに切断した。そのようにされた人間の威力は弱められたが、その数は増加した。人間は直立し二足歩行するようになった。アリストファネスは「一人を切る毎に、ゼウスはアポロンに命じて、顔と半分の頸とを廻転させて切断面の方へ向けさせた。人間が常に自分に切口を眼前に見ていて、もっと温順なものになるように。なおまたアポロンは傷を癒す¹²⁷ように命ぜられた」¹²⁸と語る。切断された人間は、原形になろうとして、相互に求め合うが、しかし、切断された人間は、飢えと活動ができなくなったために死んでいった。切断された後にも「生き残った場合には、いつもその生き残った方は別の半身を^{もと}求めてこれに纏いついた、それが往時の一つの全き女の半身に(すなわちわれわれが今女と呼んでいる者に)逢った場合でも、男の半身に逢った場合でも、こんなにして彼らは滅びて行ったのである」¹²⁹と語る。見かねたゼウスは、人間を憐れんで、「隠し所を前へ置き換えた」¹³⁰ので、「男性が女性の中に、生産し得るようになった」¹³¹。「昔

難を切りぬけることのできる機智のある人と、だまされる道化者と、冗談と、可笑しな性格とを表出する。此處では愛は氣むづかしいものではなくて、楽しく親しい。しかも他の場合に於けるが如く、即ちこれ等の場合にも亦高貴がある程度まで美との合一され得るものである」と説明している(イマヌエル・カント著(上野直昭訳)『美と崇高との感情性に関する観察』第2章 一般人類に於ける崇高と美との性状について(15ページ3から11行目))。悲劇では崇高さや高貴さを演じさせ、喜劇では機智と美とを演じさせる。悲劇では愛は陰鬱で優しいが、喜劇では愛は楽しく親しいものとされる。

¹²⁴ 前掲書『饗宴』189(77ページ14行目)。

¹²⁵ 男性は太陽から、女性は地球から、両性を兼備したものは月から出た。

¹²⁶ 前掲書『饗宴』189から190(78ページ8から9行目)。

¹²⁷ アポロンは、人間の顔を廻転させ、「四方八方から今のいわゆる腹の方へ皮を引寄せ、紐付財布の口でも締めるように腹の真中へ一つの口を造ってこれを締めた。これが現に臍とよばれている」とアリストファネスは言う(前掲書『饗宴』190から191(80ページ4から6行目))。

¹²⁸ 前掲書『饗宴』190(80ページ2から4行目)。

¹²⁹ 前掲書『饗宴』191(80ページ14から16行目)。

¹³⁰ 前掲書『饗宴』191(81ページ1行目)。

¹³¹ 前掲書『饗宴』191(81ページ4から5行目)。

から相互の愛は人間に植えつけられていた。それは人間の昔ながらの本性を再合せしめて、二つの者から一つの者を造り、そうして人間の性質に治癒をもたらすことを企てているのである¹³²と語る。

アリストファネスによると、男女^{おめ}と呼ばれた双形者の一半に当る男達はすべて女好きで、多くの姦夫はこの種族から出たあり、また、男好きな姦通家の女達も同様である。彼は、女の片割れなる女達はすべて男にはまるで興味がなく、かえって心を女に寄せると語る。最後に、男性の片割れである者はいずれも男性を追いかける。アリストファネスは、少年愛・青年愛を否定していない。少年である間は、「成年男子を愛し、またこれと一緒に臥たり抱擁し合ったりすることを喜ぶ¹³³と語る。アリストファネスは、「これこそ少年や青年のうちもっとも優秀な者なのである。なぜなら彼らは本質上もっとも男性的な者だからだ¹³⁴と説いている。大胆と勇気と男らしさが彼らにそうさせると言う。「この種の人はずっと少年の愛者となりまた愛者の友となる。彼は常にその同類を愛重するからである¹³⁵と、また少年の愛者が「彼自身の半身なるあの半身に出逢ったならば、それこそ彼らは友情と親縁感と愛恋とのために玄妙な感激に襲われて、真に瞬時といえども離れていようとせぬ¹³⁶と説いている。

彼らは何を求めているのであろうか。それは、愛人と再会し融合して二つが一つに成りたいという念願であると考えられる。それは「われわれが全き者であったというところに在る¹³⁷とアリストファネスは説いている。以前には、人間は全一であったが、「それが今では不従順の故に互いに神によって引裂かれた¹³⁸と説いている。神に逆らえば、もう一度引き裂かれることになるから、あらゆる人はあらゆる人に向かって、神々を敬うように勧めなければならぬと、アリストファネスは言う。

「全きものに対する憧憬と追求とはエロスと呼ばれているのである¹³⁹と語り、「エロスはわれわれの指導者であり、将帥である¹⁴⁰とアリストファネスは讃美する。この神に何人も逆らってはならないが、「けだしこの神の友となり、これと結合しているとき、われわれは本来われわれ自身のものなる愛人を発見することになり、またこれに出逢うこともできるであろう¹⁴¹とアリストファネスは説く。

¹³² 前掲書『饗宴』191(81ページ8から10行目)。

¹³³ 前掲書『饗宴』192(82ページ1から2行目)。

¹³⁴ 前掲書『饗宴』192(82ページ2から3行目)。

¹³⁵ 前掲書『饗宴』192(82ページ9から10行目)。

¹³⁶ 前掲書『饗宴』192(82ページ11から13行目)。

¹³⁷ 前掲書『饗宴』192(83ページ16から84ページ1行目)。

¹³⁸ 前掲書『饗宴』193(84ページ2から3行目)。

¹³⁹ 前掲書『饗宴』192(84ページ1行目)。

¹⁴⁰ 前掲書『饗宴』193(84ページ9行目)。

アリストファネスの勧告は、神々の中でもエロスの神を敬うことであった。そうすると、神は人を親縁ある者に近づけ、人間に恩恵を与え、「さらに未来においてもまた、神々に対して畏敬の念を失わぬかぎり、われわれをして最大の希望を抱かしめる。すなわちそのとき彼はわれわれを昔ながらの本性に還らせ、われわれの病を癒して、ついに天福と幸慶とを享けさせる」¹⁴²とアリストファネスは主張している。

第5節 ソクラテス（ディオティマの見解に基づき）のエロス讃美の演説

5.1 エロスはいかなる性質を持つか

ソクラテスは、ディオティマという婦人のエロスについての見解を紹介する形式でエロスについて演説した。ソクラテスは、アガトンと同様に、始め、エロスとは何かを明らかにし、次には、エロスの働きについて明らかにする。ディオティマは、エロスを「偉大な神霊」¹⁴³と言う。エロスは神と人間界の中間に存在する者であると語った。すなわち、ソクラテスは「神霊的な者は神的な者と滅ぶべき者との中間に在る」¹⁴⁴と語ったことになる。このことは、エロスには、「人間から出たことを神々へ、また神々から来たことを人間へ通訳しかつ伝達する」¹⁴⁵力¹⁴⁶があることを意味している。ト占も、犠牲や密儀や巫術^{ふじゅつ}やその他すべての予言や魔術に携わる僧侶の技術もまた神霊の仲介によると、ディオティマは言う。「神は人間と直接交わるようなことはありません。むしろ神々と人間との間の交通と対話とは一覚醒中であれ、睡眠中であれ—すべてこの神霊を通じて行われるのです」¹⁴⁷とソクラテスは語ったことになる。

エロスは神霊の一つである。エロスの父はポロス（Φόλος, Pholos）¹⁴⁸であり、その母はペニヤ（Peniya）であった。エロスはこの両親の間の息子としての境遇にあった。母からの性質を受け継ぎ、「いつも窮乏と同居」¹⁴⁹し、いつも貧乏である。エロスは、ごつごつして、汚らしく、跣足で、家無しで、「多衆が信じているような、きゃしゃとか優美とかいうのとは大違い」¹⁵⁰であるとディオティマは言う。他方では、父にも似ている。「美しい者と善い者とを

¹⁴¹ 前掲書『饗宴』193（84ページ10から12行目）。

¹⁴² 前掲書『饗宴』193（85ページ7から10行目）。

¹⁴³ 前掲書『饗宴』202（107ページ10行目）。

¹⁴⁴ 前掲書『饗宴』202（107ページ10から11行目）。

¹⁴⁵ 前掲書『饗宴』202（107ページ13行目）。

¹⁴⁶ エロスの能力には、一方からは祈願と犠牲とを、他方からは命令と報償とを伝達する力であり、エロスは、神的な者と滅ぶべき者の中間に介在してその隙間を充たし、万有は結合されて完き統一体となると言う（前掲書『饗宴』202（107ページ14から15行目）参照）。

¹⁴⁷ 前掲書『饗宴』203（108ページ1から3行目）。

¹⁴⁸ 古代ギリシア神話では、ポロスは半人半馬の怪物である。

¹⁴⁹ 前掲書『饗宴』203（109ページ6行目）

待ち伏せしており、勇敢で、猪突的で、豪強で、非凡な狩人であり、常に何かの奸策をめぐらし、しかも智見の追求に熱するとともに、けっして術策に窮することはなく、全生涯を通じて愛智者であると同時にまた比類なき魔術師、毒薬調合者かつソフィスト¹⁵¹であると語る。エロスは、「困窮することもなければ、富裕になることもありません」¹⁵²と、他方で、「智慧と無知との中間にいる」¹⁵³とディオティマは言う。

愛智者は、智者と無知者の中間にある。エロスとは美を求める愛であり、愛智者である。そしてエロスは両者の中間にある。それは彼の生まれによっている。賢明で多策（富裕）な父と無知で無策（貧乏）の母の間の子である。

エロスは、富裕と困窮の中間に在り、智者と無知者の中間に在り、これら両者を結びつける者であると、ソクラテス（すなわちソクラテス）は考えている。

5.2 エロスの人間にもたらす効果あるいは利益

美しき者を愛する場合には、愛する者は何を欲求しているのでしょうか。美しい者を手にすることによって何の得があるのででしょうか。愛する者が愛する人を手にすることによって、その愛する人は幸福になる。これがエロスの人にもたらす効果あるいは利益である。

愛とは善きものの永久の所有へ向けられたもの¹⁵⁴である。また「愛の目的が不死ということ」¹⁵⁵にもあるとソクラテスは言う。それでは、愛を追求し、愛に値するほどの熱心と熾烈な努力を示す人はどのような行動をとるのででしょうか。

エロス、すなわち、愛する者（愛者）は、「肉体の上でも心霊の上でも美しいものの中に生産する」¹⁵⁶と、そして人間の本性は「生産をすることを欲求する」¹⁵⁷が、「生産は醜い者の中では駄目で、ただ美しい者の中でだけできる」¹⁵⁸とディオティマは語る。ディオティマは、エロスが一種神的なもの¹⁵⁹で、また「滅ぶべき者のうちにある滅びざるもの」¹⁶⁰であると説

¹⁵⁰ 前掲書『饗宴』203 (109 ページ 3 行目)。

¹⁵¹ 前掲書『饗宴』203 (109 ページ 7 から 10 行目)。

¹⁵² 前掲書『饗宴』203 から 204 (109 ページ 13 から 14 行目)。

¹⁵³ 前掲書『饗宴』204 (109 ページ 14 行目)。

¹⁵⁴ 前掲書『饗宴』206 (115 ページ 10 行目)。

¹⁵⁵ 前掲書『饗宴』207 (117 ページ 12 行目)。

¹⁵⁶ 前掲書『饗宴』206 (116 ページ 5 から 6 行目)。

¹⁵⁷ 前掲書『饗宴』206 (116 ページ 9 行目)。

¹⁵⁸ 前掲書『饗宴』206 (116 ページ 9 から 10 行目)。

¹⁵⁹ また、醜い者はあらゆる神的なもの^{あふ}と調和しないが、美しい者はこれと調和すると言う。「生産衝動の漲れるものが美しい者に近づき行くとき、彼は心勇みまた歓喜に溢れる、そうして生産し受胎させる。けれども反対に醜い者に近づくと、彼はいつも面貌憂鬱となり、不機嫌に内に籠り、身をそらし、引き退り、受胎させずにただ苦しき重荷としてその生産慾をもち続ける」と語る（前掲書『饗宴』206 (116 ページ 14 から 117 ページ 1 行目)）。

いている。彼女は、エロスが神であるとは説いていない。

5.3 不死なるものを追求：愛現象とは何か

愛欲の熱烈な発動の原因は何であろうか。滅ぶべき者の本性は無窮であり不死であることを願い、その願は生殖によって達成されることが可能であり、生物（人間も含むが）は、肉体的に¹⁶¹も心霊的に¹⁶²も、「同一不変ではなく、一方では生じ、他方では滅する」¹⁶³とソクラテスは語っている。また知識についても同様である。忘れる事は知識の消失であるが、復習は消え去らんとしつつある知識の代わりに新しいものを造り出して保持し、その結果、それは元と同一の知識のような観を呈することなのである¹⁶⁴。このようにして、滅ぶべき者の一切は維持されていくのであるが、しかし「もっともそれは神的なもののように、いつまでも徹頭徹尾同一不変でいる訳でなくて、むしろ消え去る者を老いゆくものも自分と同種の他の若者を後に残して行くことを意味する」¹⁶⁵とソクラテスは説き、「滅ぶべき者は不死に与る」¹⁶⁶と語る。「不死のためにこそ、どんな者にもこの熱心と愛とが賦与されている訳」¹⁶⁷であると言う。

ディオティマ（よってソクラテス）は、人間には、功名心（有名になりたい）、あるいは不朽の名声を求める強い欲望があり、そのために財産をなげやることや、あらゆる危険を冒し、遂には命を捨てることさえ厭わなく、不朽の勲功や名声のためになら、人は如何なる事も敢行すると語る。それは「不死を愛求するから」¹⁶⁸である。また、肉体の上に旺盛な生産慾を持つ者はむしろ婦人に向い、そして子供を拵えることによって、不死や思い出や幸福などを、永遠に自分に確保としようとする。

次に、心霊的な生産慾について見てみよう。受胎と生産が心霊にふさわしいものに対して生産慾をもつ。そのふさわしきものとは、智見やあらゆる種類の徳のことである。さらに、智見のうちでも他を遙かに超えて、「最高で最美なのは国と家との統制に関するもので、その

¹⁶⁰ 前掲書『饗宴』206（116ページ11行目）。

¹⁶¹ 人は自分の内には瞬時も同一要素を保有するようなことがないが、それでもなお始終同じ名で呼ばれている。しかし他方彼は髪も肉も骨も血も、要するに肉体の全体にわたって不断に新しくなるとともに、古いものを失ってゆくと、言う（前掲書『饗宴』207（119ページ4から6行目））。

¹⁶² 気質や性格や意見や慾情や歡樂や悲哀や恐怖や、これらはいずれもどの個人においてもけって同一不変ではないと、言う（前掲書『饗宴』207（119ページ7から8行目））。

¹⁶³ 前掲書『饗宴』207（119ページ8から9行目）。

¹⁶⁴ 前掲書『饗宴』207（119ページ13から15行目）。

¹⁶⁵ 前掲書『饗宴』208（119ページ16から120ページ2行目）。

¹⁶⁶ 前掲書『饗宴』208（120ページ2から3行目）。

¹⁶⁷ 前掲書『饗宴』208（120ページ5行目）。

¹⁶⁸ 前掲書『饗宴』208（121ページ5行目）。

名は自制と公正とである¹⁶⁹とディオティマは語る。そのような徳に満ちた神々しき人は、年頃になると、生殖慾に駆られ、そのような人も「廻り歩いて、その中に生産することのできるような美しき者を求めるのです。彼は醜い者のうちに生産するようなことは決してあるまいから¹⁷⁰である。彼は、「美しくて気高くてかつ天稟の優れた魂にめぐり合わすようなことでもあれば、かく両方のよく揃っているのを非常に歓迎するでしょう。そしてこのような人に対して徳のことや、有徳者がどういうものであり、また何を業とすべきかなどについてただちに滔々たる弁舌を浴びせて、これを教育しようとする」¹⁷¹とディオティマは説き、「彼がたびたび美しき者に接触しこれと交るようになれば、彼はすでに久しく身に宿していたものを生産し創造する」¹⁷²と語る。そばにいても離れても、彼はその人のことを思い、また出生した者をその人と共に育て上げる。その子とは、その共有するもので、「いっそう美しくていっそう不死な子供」¹⁷³のことである。ディオティマは、多くの美しい業績や様々な徳を、子に譬えている。

5.4 愛の奥義と神の啓示

ディオティマがソクラテスに説いた愛の奥義は次のようであった。

初めに、完全なる愛の奥義は、目にみえる者から始まる。すなわち、はじめに、美しい肉体の追求から始めなければならない。美しい肉体を愛し、またその中に美しい思想を生みつけなければなりません。

次の第2段目に、任意の肉体の美には他の一つの肉体の美との間に姉妹関係（共通性）があることを知り、さらにあらゆる肉体の美が同一不二であることを見ぬかなければならない。さらに、「その愛をあらゆる美しい肉体に及ぼし、そうしてある一人に対するあまり熱烈な情熱をばむしろ見下すべきもの、取るに足らぬものと見て、これを冷ますようにせねばなりません」¹⁷⁴と説明する。

そして、第3段目には、心霊上の美を肉体上の美よりも価値の高いものと考えねばならない。そのゆえに、「心霊さえ立派であれば、たとえあまり愛嬌のない人でも、満足してこれを愛し、これがために心配し、青年を向上させるような言説を産み出した探し求めるようになる」¹⁷⁵と説く。その結果として、人は「職業活動や制度のうちにも美を看取したこれら

¹⁶⁹ 前掲書『饗宴』209 (121 ページ 13 から 14 行目)。

¹⁷⁰ 前掲書『饗宴』209 (121 ページ 15 から 122 ページ 1 行目)。

¹⁷¹ 前掲書『饗宴』209 (122 ページ 2 から 5 行目)。

¹⁷² 前掲書『饗宴』209 (122 ページ 5 から 7 行目)。

¹⁷³ 前掲書『饗宴』209 (122 ページ 9 から 10 行目)。

¹⁷⁴ 前掲書『饗宴』210 (123 ページ 16 から 124 ページ 2 行目)。

¹⁷⁵ 前掲書『饗宴』210 (124 ページ 3 から 5 行目)。

すべての美は互いに親類として結びついている」¹⁷⁶ こと、さらには、肉体上の美には「きわめて僅かの価値しかないことを認めるように余儀なく」¹⁷⁷ される。職業活動の次には、学問的認識の方に導かれ、そして「認識上の美をも看取する」¹⁷⁸ ことができ、たくさんの美を観察して、「奴隷のように、一人の少年とか一人の人間とかまた一つの職業活動とかに愛着して、ある個体の美に隷従し、その結果、みじめな狭量な人間となるようなことがもはやなくなる」¹⁷⁹。「限りなき愛智心から、多くの美しくかつ崇高な言説と思想とを産み出し」¹⁸⁰、力を増しかつ成熟し、「美へ向うある唯一無類の認識を観ずるまでになることが必要なのです」¹⁸¹ と説明する。

最後に、愛の極致としての美を観得する。それは、永遠なもので、生ずることも減退することない。また、どこから見ても、誰が見ても、いかなる所にあっても、いついかなるときでも美は不変である。

「全然独立自存しつつ永久に独特無二の姿を保てる美そのもの」¹⁸² として現れる。他のあらゆる美は自らは生じたり減じたりするが、美そのものは寸毫も増さず減せず、何の変化も受けけないものとして、美そのものが与えられる。

「美を観るべき器官（心眼）をもって美を観る人」¹⁸³ は、「徳の影」¹⁸⁴ よりも、「真の徳」¹⁸⁵ を産出することになる。「真の徳を産出してこれを育て上げた者は神の友となることを許される」¹⁸⁶ とディオティマは説いている。人間が不死となれるならば、その特権は真の徳を産出して人に賦与されるのであろうとディオティマは期待している。

5.5 愛の奥義に到る手順の纏め：認識論

まずはじめに、地上の個々の美ものから出発する¹⁸⁷。そして、最高美を目指して絶えず高く昇り行くこと、それは梯子の階段を昇るようにして、一つ一つの美しい肉体から二つへ、二つからあらゆる美しき肉体¹⁸⁸ へ、次に、肉体的な美よりも心霊上の美に価値を置く必要が

¹⁷⁶ 前掲書『饗宴』210（124 ページ5から6行目）。

¹⁷⁷ 前掲書『饗宴』210（124 ページ7行目）。

¹⁷⁸ 前掲書『饗宴』210（124 ページ9行目）。

¹⁷⁹ 前掲書『饗宴』210（124 ページ9から11行目）。

¹⁸⁰ 前掲書『饗宴』210（124 ページ12から13行目）。

¹⁸¹ 前掲書『饗宴』210（124 ページ14から15行目）。

¹⁸² 前掲書『饗宴』211（125 ページ12行目）。

¹⁸³ 前掲書『饗宴』212（127 ページ3から4行目）。

¹⁸⁴ 前掲書『饗宴』212（127 ページ4行目）。

¹⁸⁵ 前掲書『饗宴』212（127 ページ5行目）。

¹⁸⁶ 前掲書『饗宴』212（127 ページ6から7行目）。

¹⁸⁷ このことは、一つの美しい肉体を愛することから出発することを意味している。

ある。その結果、美しき肉体から美しき職業活動の内にも美を看取し、ついには、美しき職業活動から美しき学問に到達して、最終的には、美の本質を認識する。ここに到って美そのものを観る。

このことによって、人は、「すでに観た沢山の美を顧みて、奴隷のように、一人の少年とか一人の人間とかまた一つの職業活動とかに愛着して、ある個体の美に隷従し、その結果、みじめな狭量な人となるようなことがもはやなくなる」¹⁸⁹とプラトンは示している。むしろ反対に人は、「今や美の大海に乗り出してこれを眺めながら、限りなき愛^{フィロソフィヤ}智心から、多くの美しくかつ崇高な言説と思想とを産み出し、ついにはこれによって力を増しかつ成熟して」¹⁹⁰、「美へ向うある唯一無類の認識を観ずるまでになる」¹⁹¹とプラトンは示す。美そのものを観るに到って、人生は生き甲斐がある。

むすびにかえて

この論稿では、プラトンの対話編『饗宴』のエロスあるいは美に関する演説から、認識することの含意を把握するための道筋（方法論）について検討した。個別・具体的な美しいものから美そのもの（すなわち、美の本性、あるいは美の本質）の認識に到る手順について考察した。この手順は、プラトンの『饗宴』において示された、人を愛することからものの本質の認識に到る手順から導き出したものであった。よって、本稿では、個別の美しい肉体から美そのものに到るための手順が考察され、それは、個別の肉体的な美しさを求める者（愛する者）が、

- (1) はじめに、この世の個々の美しいものに心を引かれることから出発し、つまりある人の顔や手とかその他肉体に属するものの美しさから出発し、
- (2) そして、最高美を目指し、梯子の階段を昇るように、絶えず高く昇っていく、すなわち、一つ一つの美しい肉体的な美しさから二つへ、二つからあらゆる美しき肉体へと進み、そして、あらゆる肉体の美が同一不二であると看取し、一人に対する熱烈な情熱が取るに足らぬものと見て、その熱を冷まし、その愛をあらゆる肉体に及ぼし、
- (3) そして、美しき肉体から美しき心霊に進み、肉体的美しさより心霊上の美しさに高い価値を置き、
- (4) 次には、美しき職業活動へと進み、たとえば、最高で最美な国と家の統制に関するこ

¹⁸⁸ あらゆる肉体の美が同一不二であること感じ取らなければならない。そうすると、愛をあらゆる肉体に及ぼし、ある一人に対する熱烈な情熱を取るに足らぬものとして理解し、その熱を冷まさなければならない。

¹⁸⁹ 前掲書『饗宴』210 (124 ページ9 から11 行目)。

¹⁹⁰ 前掲書『饗宴』210 (124 ページ12 から13 行目)。

¹⁹¹ 前掲書『饗宴』210 (124 ページ14 行目)。

とへと進み、

(5) さらには、美しさ（エロス）を語るには、美しいさの真実を究める必要があるので、美しき職業活動から美しき学問に進み、その学問から美そのものの学問に到達し、

(6) 最終的には、美の本質を認識する。

このように、美そのものを観得する（認識する）方法論を考察した。美は不変であり、増加したり減少したりすることはない。また、あるときは美しく、あるときには醜いということもない。美そのもの観想する人は、真の徳（徳の影像ではない）を産出することに成功する。それは、理性によって観想される。

プラトンは、肉体的な愛欲者から愛智者に到って、ものの本性あるいは本質を見極めたことになると語りかけている。また、そこに到って、人生は生き甲斐があるとプラトンは主張している。プラトンの『饗宴』において、肉体的な愛欲者が、次に、愛智者となり、最後には、美そのもの（ものの本性）の認識することに到ることを本稿では考察した。

『饗宴』では、ソクラテスが愛した少年アルキビアデス（Ἀλκιβιάδης）¹⁹²（前450年頃-前404年）の語りを通して、ソクラテス像を提供している。このようにソクラテスを登場させるのは、プラトンがソクラテスを師として仰ぎ、その記念としてただけでは無く、プラトンは、ソクラテスをエロスの具現者として登場させていると思われる。この対話編の翻訳者である久保氏は、「エロスのもっとも完全なる人間的具現者としてソクラテスの人物を描いている」¹⁹³と解説し、「すでに抽象的に論述したところの実例を挙げて具体的に表示し」、よって「彼の所説にいっそう強き説服力を与えんとしたものである」¹⁹⁴と説いている。筆者もこの見解に同じである。

なお、アルキビアデスによって語られたるソクラテス像の一端を示すと、次のようになっている。アルキビアデスは、

「この人ほど摩訶不思議な人間は—人物といい言説といい—今人の間にも古人の間にも、おおよそこれと似通った者をすら探し出すことはできないであろう」¹⁹⁵と評する。「結局、僕のもののように、彼を、その人物ならびに言説を、人間と比較することを止めて、シレノスやサテュロスに比較するよりほかないことになるのである」¹⁹⁶とこの世の人とは隔絶した人と

¹⁹² プラトン著（三嶋輝夫訳）『アルキビアデス』のソクラテスと対話する登場人物である。アルキビアデスは、第一次ペロポネス戦争（アルキダモス戦争）後の講和条約に不満であった。よって、前415年にシケリア遠征を提唱した。第二次ペロポネス戦争をおこす。彼によってシケリア遠征が行われたが、その遠征は無謀であったために、アテナイは、2度のシケリア遠征に敗北した。デロス同盟の被支配市から離反が相次ぎ、情勢はペロポネソス同盟優位に傾いていった。

¹⁹³ 前掲書『饗宴』序説（28ページ8から9行目）。

¹⁹⁴ 前掲書『饗宴』序説（28ページ11から12行目）。

¹⁹⁵ 前掲書『饗宴』221（148ページ2から3行目）。

してソクラテスを語っている。「ソクラテスの言説を聴こうとする者には、それは最初はきつときわめて滑稽に見えるであろう。それはまさに、傲慢なサテュロスの毛皮にでも比較すべき詞やいい廻しで外側から包まれている」¹⁹⁷が、ところが、「それが開かれるのを見、その内部に押込んで行った者は発見するであろう。第一には、ただこの言説だけが内に意味を包蔵していることを、次にはそれが極度に神々しく、徳の像をきわめて多く内に蔵していることを、またそれは気高かつ優良になろうとする者が目指すべき非常に沢山の、というよりもむしろ一切のものを包括していることを」¹⁹⁸とソクラテスを頌讃している。

アルキビアデスは、「僕にはそれが非常に神々しく、黄金のごとくに、また限りなく美しくかつ驚嘆すべきものと見えた」¹⁹⁹ゆえに、彼は、「僕は、ソクラテスの求めることならなんでもただもう実行せずにはいられなくなったのである」²⁰⁰と告白している。より詳細なソクラテス像については別稿で考察する。

本稿の最後になるが、プラトンのイデア説が今日の経済学の認識論にどのように関連している、あるいは関連させようかについて考察をこころみよう。今日の経済学では、市場での取引が均衡でおこると想定し、その均衡は存在すると立証されている。この立証では、多数の生産物市場があり、各市場には多数の売り手と多数の買い手が取引に参加し、そしてそれぞれの経済主体は効用最大化行動あるいは利潤最大化行動をしていると想定され、さらに売りたい数量が買いたい数量を超過しているときには取引価格が低下し、逆に買いたい数量が売りたい数量を超過しているときには取引価格が上昇することを仮定²⁰¹して、競争均衡が

¹⁹⁶ 前掲書『饗宴』221 (148ページ3から5行目)。シレノスについては前掲書『饗宴』215 (134ページ9から10行目)を参照。シレノスとは、ギリシヤ神話の川と泉の精霊で、半人半獣であった。シレノスによって、ソクラテスの風貌を表現しているのであろう。シレノスのように半人半馬で、胴体(臀部から背中に掛けて)は馬であり、前脚と胸部と顔は人間であった。耳は馬のようで、鼻は獅子のように低かった。

また、上掲書『饗宴』215 (134ページ12から13行目)でのサテュロスは、シレノスと同様に川と泉の精であるが、半人半山羊である。サテュロスのマルシユアスと容貌が似ただけではなく、マルシユアスはアウロス(二つのリードの木管楽器)の名手であった。(『饗宴』では、笛と訳されているが、アウロスであったと考えられる)。

¹⁹⁷ 前掲書『饗宴』221 (148ページ7から9行目)。

¹⁹⁸ 前掲書『饗宴』222 (148ページ11から15行目)。

¹⁹⁹ 前掲書『饗宴』217 (138ページ7から8行目)。

²⁰⁰ 前掲書『饗宴』217 (138ページ8から9行目)。

²⁰¹ 経済学では、各生産物の超過需要量は、価格ベクトルの連続関数であると仮定される。この超過需要関数は、価格ベクトルの連続関数であると仮定される。均衡では、正の価格ベクトルに対して、各生産物の超過需要量は非正である。

2生産物の市場経済に均衡が存在することを例示することはできる。均衡価格ベクトルの集合をEとする。各ベクトル $p' = (01)$, $p'' = (1, 0)$ としよう。この価格ベクトルが均衡価格ベクトルではないとしよう。この仮定のもとでは、生産物1と2の超過需要量 (z) は、 $z_1(p') > 0$ あるいは $z_2(p'') > 0$ である。いま、 $z_1(p'') > 0$ の方を考えると、ワルラス法則

存在することが示されている。この競争均衡の状態では、すべての取引される生産物の均衡価格は正になり、効率的な資源配分が達成されている。真の市場均衡そのものが存在することから、現実の市場経済の均衡を、真の市場均衡そのものの類似した、あるいは似絵として捉えることはできるかもしれない。

その認識方法は、プラトンのイデア説であるとも考えることもできる。競争均衡は、均衡から類似される影、すなわち“影像”であると認識することができるかも知れない。均衡という観念は、理性によって捉えられる実体である。それでは、“均衡そのもの”はイデアとして与えられるのであろうか。独占的競争均衡、クルーノー均衡、ナッシュ均衡などの均衡が経済学では取り上げられるが、これらは、“均衡そのもの”と類似した状態を表している。均衡は一種の調和した状態であるが、その状態は自然な状態なのであろうか、それとも偶然に生じた状態なのであろうか。経済学では、人間としての消費者あるいは生産者の自由で自発的な活動の結果として、均衡状態が達成されると考えられている。

引用文献

- (1) ヘシオドス著（廣川洋一訳）『神統記』岩波文庫，1984年。
- (2) ホメロス著（松平千秋訳）『イリアス（上）（下）』岩波文庫，2017年。
- (3) プラトン著（藤沢令夫訳）『パイドロス』岩波文庫，1974年。
- (4) プラトン著（三嶋輝夫訳）『アルキピアデス』講談社学術文庫，2017年。
- (5) プラトン著（久保 勉訳）『饗宴』岩波文庫，1971年。
- (6) プラトン著（田中美知太郎・池田美恵共訳）『ソクラテースの弁明』新潮社，1973年。
- (7) プラトン著（藤沢令夫訳）『国家（上）（下）』岩波文庫，2009年。
- (8) イマヌエル・カント著（上野直昭訳）『美と崇高との感情性に関する観察』岩波文庫，1986年。

$$0z_1(p') + 1z_2(p') = 0$$

から、この第1項がゼロであるので、この第2項は、 $z_2(p') = 0$ となる。これは、価格ベクトル p' が均衡価格ベクトル集合に含まれないという想定に反する。ゆえに、 $z_2(p') \leq 0$ である。同様に、 $z_2(p'') > 0$ の場合にも、ワルラス法則が想定されると、 $z_1(p'') \leq 0$ が得られる。

次に、 m が 0 と 1 の間を動くとき、価格ベクトルを $p(m) = mp' + (1-m)p''$ とする。ワルラス法則は

$$p(m)z(p(m)) = 0$$

と表される。いま、 $p(m) \in E$ でないとしよう。すなわち、 $m = m^0 \neq 0, 1$ のとき、 $z_1(p(m^0)) > 0$ および $z_2(p(m^0)) < 0$ を想定する。 $m = 1$ のとき、 $p(1) = p' = (0, 1)$ で、想定より、 $z_1(p(1)) = z_1(p') > 0$ であるので、 m^0 から 0 に向けて連続的に変化すると、生産物の超過需要量がゼロになる価格ベクトルが存在する。生産物 1 の超過需要関数の符号が正から負に変わる $m = m^e$ が存在する。このとき、 $p(m^e) \in E$ である。またワルラス法則によって、 $z_2(p(m^e)) = 0$ である。

この価格ベクトルが、均衡価格ベクトルである。2 生産物の市場経済において、均衡の存在が示された。

（ここでの展開は、アロー&ハーン、*General Competitive Analysis*, North-Holland (Oliver&Boyd), 1971 による。アロー&ハーンの均衡には、多くの競争均衡論者と同様に公共財が存在しない世界での均衡の存在と整合するこの経済主体の効用最大化行動であり、利潤最大化行動である。）

- (9) ルネ・デカルト著 (榊田啓三郎訳) 『省察』 角川文庫, 1970年。
- (10) Kenneth J. Arrow and F. H. Hahn, *General Competitive Analysis*, North-Holland, 1971.

参考文献

- (1) アダム・スミス著 (大内 兵衛・松川 七郎訳) 『諸国民の富』 (四) (岩波文庫, 1992年)
- (2) プラトン著 (藤沢令夫訳) 『メノン』 岩波文庫, 2004年。
- (3) プラトン著 (久保 勉訳) 『ソクラテスの弁明』 岩波文庫, 2018年。
- (4) プラトン著 (藤原令夫訳) 『バイドロス』 岩波文庫, 2018年。
- (5) プラトン著 (三嶋輝夫訳) 『ラケス — 勇気について —』 講談社学術文庫, 2017年
- (6) ジョン・ロック著 (加藤 節訳) 『統治二論』 (岩波文庫, 2010年)

(くぼた よしひろ マクロ経済学と金融論)